

冒険遊び場 | プレーパーク

冒険遊び場とは？

冒険遊び場は、子どもが「遊び」を作る遊び場です。

そこでは火を使ったり、地面に穴を掘ったり、木に登ったり、何かものを作ったり…。

落ち葉やどろんこや自然の素材を使って、遊び場にあるスコップや金づちや大鍋を使って、自分のやってみたいと思うことを実現していく遊び場です。さまざまな遊びが展開されていくので、変化し続ける遊び場とも言えます。

禁止するのではなく、一緒に考えてやってみる。

のびのびと思いきり遊べるこの遊び場は、子供が生きる力を育むことを支えています。

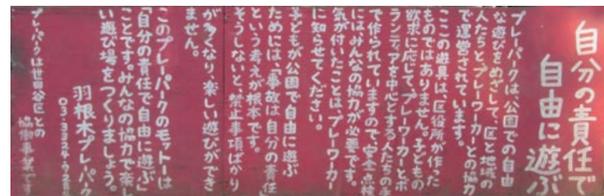


写真 プレーパークの理念 世田谷区HPより 2022/1/21



子どもにとって「遊び」とは？

遊びは、子どもにとって生きることそのものです。

子どもは、自然環境の中で遊び、たっぷりと五感を使ってさまざまなことに興味を持ち、いろいろな人とかわりをつくり、自分のやり方や自分のペースで、創意工夫をし、挑戦し、失敗し、それをのりこえて成長していきます。

遊びは、その全てを子どもに届けることができるのです。

プレーリーダーとは？

プレーリーダーは、冒険遊び場には欠かせない存在です。

プレーリーダーの役割をひとことで表すと

「子どもがいきいきと遊ぶことのできる環境をつくること」といえます。

子どもの興味や関心を引き出すよう、いつも遊び場を整備しています。

つねに変化する遊び場の状況に応じて注意を払い、子どもに声をかけます。

子どもといっしょに思いきり遊び、子どもが厚い信頼をよせる相手です。

ときには、子どものよき相談相手になることもあります。

ケガや思わぬトラブルにも対応します。

大人は子どもの遊びを規制しがちになりますが、

そんなときには子どもにかわって子どもの気持ちを伝えます。

こうして、子どもののびのびとした成長を見守る輪を、地域に広げていきます。



冒険遊び場の始まりと日本での広がり

世界



1943年
コペンハーゲン市郊外にデンマークの造園家ソーレンセン教授の提案によって、世界で初の冒険遊び場「エンドラップ廃材遊び場」が誕生。

1945年
「エンドラップ廃材遊び場」に感銘を受けたイギリスの造園家アレン卿夫人は、ロンドンの爆撃跡地に冒険遊び場を作る。

1950~70年代
イギリスで大きな流れとなった冒険遊び場づくりは、発祥の地、デンマークに逆輸入され、やがて、欧州各地、アメリカ、オーストラリア、そして日本にも広がっていった。

日本

1973年
大村夫妻は、アレン卿夫人の著書「都市の遊び場」を翻訳。

1975年
大村夫妻は世田谷の地域住民に欧州の子ども達が冒険遊び場で遊んでいる映像を見せる。それに感銘を受けた地域住民は、世田谷区で冒険遊び場の前身となる、「経堂子ども天国」を夏休みに開催。

1979年
行政と市民による協働運営で、世田谷区の国際児童年記念事業として日本初の常設の冒険遊び場「羽根木プレーパーク」が誕生。